

故人日記の中より

明治二十九年日記拔萃

一月十一日（土曜）

今朝は又々寒さ一入強かりしが、果して六花紛々、一時は時ならぬ銀世界を現出せしが、とても地上に積る勢もなく、終日ひらひらとしながら夜に入りて止みたり。

本日は土曜日にて、且日向油津への出船日なるを以て、一入彼是多忙なりき、夕方より兼て約せし尙育會神戸支部員の新年宴會を、當地北長狹の播半樓に開くを以て、午後六時より車して赴けり、會場已に吉田、堀口、小川、阪田、横山、外に新顔の中村、福地、なんどの諸兄來會し居り、小生と共に大口兄も來れり、座定まりて新年辭を述べ暫くあつて井口、米原、石巻、勝部、久村、外某氏都合十五名の定員となりしを以て、配膳置酒獻酬相應じ、殊に從來の宴席と異なり、S、D、などの動物を混ぜず、各自新しく膝を交へての酒座なりしを以て、一入愉快を感じたり、酒酣に腹滿てたる頃已に九時に垂んとす、依て勝部兄の本夜九時四十分の列車に搭じ歸省の途に着かんが爲め

席を辭するに伴ひ、余も匆々辭し歸れり。

二月六日 (木曜) 若林秀吉兄今曉二時死去せられし由耳にす、噫一堂の下に相會し寢食を共にせし店友今や幽明界を異にす、誠に人生朝露の嘆に堪へざるなり、知友相謀り應分の黃白を醸し、聊か以て氏が亡靈を慰する所ありたり。

二月十一日 (火曜、天氣晴) 午前九時頃より楠公前の大黒座に赴き、店員一同總見物をなす、こは東京の俳優市川左團次一座當地に來りて、伽羅先代萩と丸橋忠彌を演ぜしに、流石は名優得意の藝とて、中々の人氣なるを以て、奥よりの命にて一同見物をなせしなり、此の如きは鈴木商店にあつては、前代未聞の思ひ立ち、店員數多き中とて事故ありて不參せし向もあり、同道せしは七名なりき、此日は恰も紀元節の祭日に當りしを以て、場内立錫の地なき程の大入を占め、丸橋忠彌は優の十八番丈けあり頗る看客の喝采を博せり。

二月十三日 (木曜、天氣晴) 午後商館廻りを爲し、九十一番に至りしに、大阪より電話ありしとて、二三日前朝鮮京城大變あり、露國水兵百餘名上京、外務大臣殺害などのことあり、大阪株式所餘程の混雜なりき云々、歸宅すれば果して事實なる

趣暫くして朝日號外を發して矢張右の詳報を齎したり、金弘榮と鄭果、夏の二氏は殺害され、新内閣組織せられたり、大院君と宮内大臣李載冕氏は露公使館に連れ行かれたりと。

今夜は居留地八番館主エムポールス氏歸國せらるゝを以て、送別の宴を兵庫常盤花壇に開かる、余も亦招待を受け、六時半頃主君と共に車して花壇に赴けり、出席者は阪神の豪商五十餘名、加ふるに數十の舞妓酒間を斡旋し、舞曲、手品の餘興あり殊に頗る鄭重なる饗應にて、主人公ポールス氏始め八番の洋人男女十二三名列席何れも打融けて獻酬し、十二分の快を盡して十時前車して歸店せり。

三月七日 (土曜、天氣晴) 午前八時過より店用の爲め車して二十番ルカス商會の技師ボイア氏の私宅を訪ふ、面會の上樟腦入津の旨を告げ、購求の意なきや否を問ひ歸店す。

午後商館廻りを爲し、日没より兼て約ある在神全國商業學校出身者聯合親睦會場なる神港クラブに赴けり、此夕會するもの滋賀、大阪、京都、神戸、馬關、長崎等の各商業學校出身者メ七十餘名にして、席定まりて堀口菊二郎兄立つて開會の辭を述べ

らるれば、各校の總代交々起て挨拶を爲し、夫れより聯合同窓會を設くることに決し、交渉委員選舉の爲め兎も角各校より一名宛の奔走委員を任命し、酒酣にして各自其抱負を吐露し、終に在神高等商業學校卒業生が、本日の會に參列を求めしにも拘らず、事故ありとて一名も出席せざるは不穩の擧ごし、直に各部一名宛の談判委員を選び、右高商校出身者に就き入會せざるや否やを問ひ、應ぜざる曉には斷然相拮抗せんことに決し、散會したり。

三月十四日 (土曜、天氣晴)

本日は頗る附の好天氣温度大に進む、本日朝日

新聞にて「河内の孝子」と題する一項を讀みしに、河内國交野郡川越村茄子作、土井留吉の長男忠太郎は、親に事へて至孝にして、學事に心を寄す、頗る熱心なるも家貧にして書を購ふの資なきのみならず、日々校を退きて内に歸れば、母を助けて家事を手傳ひ、夜は繩をよりにて餘暇あれば書を廢せざる由を聞き、其孝心實に感ずるに餘りあるを以て、余は他人ながらも其孝心を賞て、金壹圓を封入したる手書と、外に少年文學三號一冊を郵送せり。

四月三日 (金曜、天氣晴)

本日は神武天皇祭にて殊に晴朗なる天氣なりし

を以て、市民の外出諏訪山再度山等へ足を向けるもの頗る多し、余も朝より店へ出てしが、店も本日は早朝より休業なれば、久々に積鬱を散じ、病魔を驅逐せんと志し置きり。午後二時頃より小松、清岡、安東及余の四人、主人を擁して諏訪山登りを企てしが、半途まで上りしに熱汗出て堪へ兼ねしにより、其のまゝ下山し歸來す、夕方まで早稻田文學を讀み、夕方主人と共に現長に至りて晚餐を喫し、七時より矢上兄と外出、楠社内湊亭に至りて落語を聽く、十時歸宅就眠。

六月十四日（日曜、天氣晴、後雨） 本日は亡主君三回忌の當日に付、佛事供養を北長狹七善福寺にて催さる、余等は命に依り午前九時頃より同寺に至りて法事を手傳ふ、十一時頃に至り參詣人二十名に垂んごし、讀經始まる、正午過より膳部配置、酒宴の段となり、暫しは飲食郷を演じ來り、午後二時頃に及びて余等も亦饗應に預り、三時過歸店せり。

六月十五日（月曜、天氣晴） 亡主君永眠の當日なれば、午後六時頃より金子長山、矢上、清岡並に小生の五人、主人を擁して亡主君の墓參をなせり。

七月十一日（土曜、天氣晴） 客年四月店員相集まりて設けし拜金懇和會今

回會員の協議に基き一先解散することになり、各自出金を分配せり、余はツイーエン出金したるに、金高より四錢不足にて分配を受けたり、こは客年創立の際前懇和會の負債二圓餘ありしを引受けしにより、其後の日歩さへ加へしも右の如き不首尾に了りしなり、さても奇なる貯蓄法かな、預け金して全額に食ひ込むとは。

谷兄より臺灣土産ゴールデンバースアイヌてふ西洋煙草一罐を頂戴せり。

八月十三日（木曜、天氣晴） 船山堂にて經世小策下卷一冊を求めしめたり先に一本を求めしに人に貸し、急に返り來る見込なければなり。四五日前よりアゴの傍耳の邊より掛けて「グレイ」を生じ、食事の度毎に引つけ痛みを覺ゆ、これ余昨今無人なる折にも拘らず、當年上半季決算を爲さざるべからず、根をつめて執務せし故、所謂ケンビキならんごさまで心に懸けざりしに、今朝起きて見れば局部の腫れ方甚しく、痛み亦近日の比にあらず、依て午前八時吉田病院に就て受診す、藥を貼用し外に飲藥一瓶を與へられたり。

八月卅日（日曜、大風雨） 明日は二百十日の大厄日なりけるにや、今朝より曇天、今にも雨至らん氣合なりしが、果して午前十一時頃より風出て雨至り、午後三

時頃に至り益々風力を増し來り、人家の棟さては梢を掠めて飛び去る風は、一種の響を發し物凄きまでなりき、夕方に至れば颶風雨を捲き歩行困難なる程なりき、夜更くるに及び暴風雨益々猛烈を加へ來り、終に午後十一時半頃に至りて、湊川堤防新橋の上手の處六七十間程破壊し、濁水は蕩々として福原町より下相生橋下即ち湊町多聞通橋町相生町へ侵入し來り、家屋の浸水二三千戸を算ふるに至る、警鐘は耳朵を聳にし、濁水の甚しきは二階に及びしもあり、大抵床上淺きは六七寸より尺深きは二尺乃至三尺に及びしさへあり、福原にては溺死人四五十を數ふべく、巷説には一百有餘の死人ありと云ふもあり、中々の混亂、爲めに電報電話は勿論汽車さへ不通となりたり。

九月十一日 (金曜、天氣晴)

本日は見事なる晴天、連日陰雨濛々の裡に殆ど困殺せられんとせし揚句とて、恰も日本晴れせし心地、秋風習々として至り、其快冷譬ふるにもものなく、積日の鬱を散ずるに餘りありと喜びしもうたてなや、午後二時前と覺しき頃、東西に雨雲見はれしと思ふ間に、細雨蕭々として來り、四時に垂んとするに及びては、殆ど車軸を流さん計りの急雨なり、噫天何ぞ暴威を逞うするの甚

しきや。

夜に入りて雨益々烈を極め、再び何日晴天を眺め得られんか覺束なき限りにこそ、異境に在る孤客、郷里水害の凶報相次いで到り、轉た旅愁を解くに由なきを憾む。

九月十三日（日曜、天氣晴） 幾萬の人家と幾千萬の財産を屠りし雨天も蛇

の目を洗ひし如くに晴れ渡り、空霄一碧拭ふが如く、秋風習々衣襟を吹いて快く、小春日和の氣味憎きまで濃かなりき、天候も又こゝにて一段落か。

夕方文之介より水害の報至る、郵便の通ぜざりし故か、九日出の信書と十一十二兩日出の葉書二葉一度に着せり、文中記する處に依れば、六日の夜天川の堤切れ、十二時には家内に浸水、三時には床上に來り、已に昨今床上一尺五寸路上五尺餘あり更に減水の見込なき由、老幼は難を天神の知己二家に避け、他は二階住居なる由、殊に十一日夜は伊吹嵐にて波高く、沿湖の人家流失損害多し云々、兼て災害の非常なるは期せし所と雖も、如此とは夢想せざりしに、實に意外の慘狀、何様浸水中の走り書にて舍弟の文通大に詳細を缺き不十分なるを以て、直に答書として安否を問ふこと懇ろに、外心に懸る十數件につき被害の有無を問質し、外に文五郎ゆか並に安

永伯母へ此旨を通知せり。

夕方大急にて今津の知己左記の人々へ洪水見舞狀を發す。

西川榮次郎 今井市太郎 櫻田鐵次郎 中井治三郎 西川文七 杉橋長次郎

池本宇之助 伯父文三郎 前川利吉 堀井長四郎 中村七郎 安達清兵衛

堀井圓次郎 中井喜左衛門 西川文吉 北村五平 今井三藏

九月三十日 (水曜、天氣晴) 今曉金子兄急用を帶び、洋服店の花主姫路の某

破産の風説ありしゆゑ貸金處分方につき、播州へ赴き、今朝の商用處理の方法手紙にて示し置かれしを以て、早朝より力を盡せしが、本日貿易銀行の割引七千五百圓を始めとし、焦眉の急を告げたる支拂一萬二千あるをもて、兼て西田氏より一萬五千借入の約定あり、店員小松道彌兄を二番汽車にて大阪三和店へ遣せしに、俄に西田氏より呼付けられ小生參上せしに、無抵當にては貸すこと克はずとのことなれば、約束手形を認め持參せしに、擔保品の書附なくては叶はず云々、元より銀行割引の性質たる、從來擔保品を差入れざる制なりしにより、其用意なし、其旨答へしに中々聞入れの模様なし、小松兄は空しく大阪三和店に待ち居り、西田氏は大阪へ案

内せず實に困却せり、金子兄は漸く午後二時前に歸神し、直に西田氏に談合せしに漸く許されしを以て、小松は一度歸神し再び上阪、夕方に至りて定めたる金子を受取り來れり。

十二月八日（火曜、天氣晴） 今朝五時半頃曉起六時三十七分の列車にて上

阪す、御寺に着せしは八時過なりき、直に父に會うて伯父の病狀を問ひしに面白からざる趣、昨夜は頗る重體にて一時は命旦夕に迫るかと思はれ、今朝は北村兄早朝より車して心齋橋局より國元と京都と小生へ打電し、吉田病院長を迎へのため且は文之介文五郎二人へ危篤の報を齎らすため赴かれし由なり、急ぎ伯父に侍せしに、去月廿三日余が見し時とは一層の衰體にて、顔色蒼黒肉落ち一見此世の人とは思はれず、やがて文之介文五郎來り、午後は安永氏伯母みな子と共に、外に國元よりは伊四郎來着せり、夜に入りて北村五三郎、今井三藏二氏來阪、吉田大醫來診せられしが、中々の重患なれば急に全快はとても望むべからず、且腹部を切割して水を取らざれば不可なりと云ふ、醫士池田氏は今手荒き手術を施すよりはじりじり氣長に手當する方萬全の策なるべく云々、父は安永氏と共に協議し池田氏の言の如く

するに決したり、國元へは此事を詳報したり。

文之介文五郎は八時より歸途に着きたり、余も本夜歸神の筈なるも、伯父の病勢氣づかはしく、依て文之介に托して主人へ其旨發電せしめ、了つて主人へは信書を以て委曲申送る所ありたり。

十二月十一日（金曜） 天氣雨　父より來信、伯父の容子は衰弱するのみにて

一向拂々しからず、御寺にても日夜祈願なされ、明十二日は七日の上りなれば定めし御利益あらんかと樂まる、何様重患なれば苦むのみ目も當てられず云々、此手紙を主人に見せ、明日は一大厄日の如く思ひ、午後十時過就蓐、未だ眠らてありしが十時三十分と覺しき頃、電信………の一聲は余の耳朵を貫けり、取次の小童西川文藏と呼ぶ、素破や一大變と蹶起、取る間遅しと開封せば、「イマシンダコイ」一片の電信は伯父の病死を報じ來りしなり、萬事休、矣敢て躊躇すべきにあらねば、車を命じ衣を更むる閑もあらばこそ、三宮ステーションへ馳付け、辛うじて十時四十二分の列車を捕へて上阪す。

十二月十二日（土曜） 天氣晴　梅田に着せしは零時頃なりき、車を傭はんと

欲するも深更、分けて偏鄙の天王寺へは誰しも快く應せず、止むなく一人の車夫を招き代價は望まむとして天王寺へ急ぐ、三日月は氷の如く中天に輝き、風力肌を切るかと怪まる、携ふる所は傘一本のみ寒冷堪へ難し、一時半前天王寺に着し、直に伯父の病室に赴きしに、會するもの父、伯母、うたすみ、みな三子、北村五三郎、舎弟文之介、文五郎、伊四郎のみ、向山倫明氏は死體に向ひて讀經し、伯父は死して體冷きこと寒氷に觸るゝ如し、而して枕頭の線香の煙は空しく上り、長へに眠る黄泉の客、昨日までは伯父……而も唯一の力と頼みし西川文三郎氏の屍體を繞りて力なし、涙を吞んで列座の諸氏に弔詞を述べ、當時小生の胸中泣かんと欲するも胸迫り涙出づる能はず。

十二月卅一日（木曜）　烏兔匆々、廿九年も本日を以て逝かんとす、追想すれば

本年程不幸なりし年は無し、夏季は風伯雨師の爲めに郷里の家産半ば蕩盡し去られ、次で伯父の訃音あり、年末に及んで亦最も悲しむべき出來事に接せんとは、こは天なり命なり誰をか恨み何をか悲まん、人々は明日の元旦を喜び狂ふに、余獨り悄然として爲すこと手に着かず、不景氣極まることなり。

明治三十年日記拔萃

二月一日（月曜、天氣風）朝來曇天にして風烈しく海上風波高し、小野濱に碇泊する旗艦松島を始め外八艘の軍艦、京都大宮御所の方に向つて嚴然整列したる、一偉觀たり。

二月二日（火曜）午後二時皇太后の御靈柩青山を發し京都へ向はせらる、爲めに當港碇泊の軍艦は正午より弔砲二十一發宛を放つ。

二月二十一日（日曜、天氣晴）本日は珍しき快晴にて日曜日にもあり、探梅にぞて雅杖を曳く人夥し。

午後より主人始め金子、柳田の二兄等岡本梅見に赴かれ、留守居を命ぜらる、余等差したる急用もなければ淨瑠璃名作集を閑讀す。

四月四日（日曜、天氣晴）兼て大阪諸劇場にて公衆の觀覽に供し、至る處喝采を博せし、佛國里昂府レミユール社發明の自働寫眞當地へも來り、相生町の相生

座にて一兩日前より諸人の縦覽を待てり、今夜主母夫人至り一見せられしと見え歸來其技の妙なるを賞め、店員一同にも是非繰合せ一見せよとなり、依て直に柳田氏の勧めにより、余と外に金子喜多、小松の五人同座に至る、午後九時過なりき、門前人波立ち甚だ喧噪を極む、入場券を求め押しつ揉まれつ入場すれば、電氣作用とは云へ其技術の巧妙なる感賞せざるものなく、人智の進歩恐ろしき程なり、即ち余等が見しは總計十葉の自働寫真にて、第一は外國女子勞働の様、第二獨逸先帝銅像竣工につき觀兵式、第三露國戴冠式、當日各國公使式場より退席の處、第四鍛冶屋の場、第五倫敦市中を汽車進行中に寫取りし景、第六伊太利の舞踏、第七倫敦公園の競馬會、第八ゴビ大沙漠を西班牙騎兵千五百人列を組み横斷する景、第九生徒遊泳の景、第十花園等にて水のかけ合ひ、何れもたゞ妙絶奇絶と云はんのみ、歸店せしは十二時なりき。

五月二日（日曜、天氣晴） 本日は須磨の病客店員矢上豊七兄を訪はん筈な

るを以て、朝來其用意を整へ、先づ同兄の註文品たる品々を調へ、外に中飯の用意にとて増田壽司二折と正宗一瓶ビスケット一袋を持參し、小松道彌兄と共に午前十

時五分の列車にて須磨へ赴く、此日日曜日にて稀有の晴天なりしかば、ステーション内乗客山をなせり、依て青切符をはづみ、氣笛一聲須磨に着せしは十時半頃なりき、馳てステーション前のステツキ店にて須磨名物の櫻ステツキ一本宛を求め病院に至る、暖氣なりしたため矢上兄の病室に至りし時流汗背に普ねし、空腹なるまゝ立ろに携へ來りし壽司と正宗に舌鼓を打ちて腹を肥し、閑話四出、一時肺病患者の病室は時ならぬ酒讌場と化しぬ、矢上兄は此前余が見舞ひし時に比しては、頭髮短く刈りしたためか稍健康に向ひしやう思はれ、殊にセキは起らず、呼吸は不相變苦し氣なるも前のごときは左まで苦しきやうにも見えず、對談時を移し、余等二人は本日舞子公園に遊ばん野心あるを以て十二時半病院を去りしが、須磨發舞子へ向ふ列車の發する時までには四十分餘もあれば、小松兄と共に保養院内の温泉に浴し午前の流汗を洗ふ、それより須磨海岸を傳うてステーションに至る、それより一時半發の列車にて公園に至り、海濱に最も近く眺望絶佳なる處に休息所の設けありしかば、こゝにて再び茶女にビールを持來らしめ、密柑を下物に淡路島を見ながら心憎き程快き潮風に吹かれつゝ時の移るを覺えず、午後二時半頃同所を去り歩し

て舞子ステーションに向ふ、此間の風景は夙に世人の知る所今更禿筆を弄するまでもなし、舞子ステーションに到れる時、發車時間に二十分餘の閑ありしを以て、ステーション内の茶店に驚げる舞子焼の襦揚子四つと、外に洒落たる小壺の如きもの、小松兄も二三の焼ものを求め、各々袂の中にがらがら云はせつゝ、兵庫ステーション迄の切符を求め乗車せり、やがて下車せしより歩して多聞通まで來れり、(小松兄は須磨ステーションに列車着せしときより心地悪しとて、眞青なる顔色にてひよろひよろせり、併し暫くありて治せり)多聞通より車して歸店す、時に午後五時過なりき。

本日は朝來頗る好天氣にして、たゞ余等が保養院の温泉に浴しつゝある頃より曇天に變ぜしも、雨など降る心配もなく十分の快樂を盡せしは近來になき日曜なりき。

五月五日 (水曜、天氣晴) 昨夜求めし馬場辰猪は今朝に至りて一讀し了れ

り、當年の志士馬場氏の形容紙上に躍如たり、一讀坐る懦夫を奮起せしむるに足ると云ふべし。

五月十一日（火曜、天氣雨）

午後五時前より金子兄と共に、當町松岡旅店に

滯在中の朝鮮人二名を訪ふ、先に酒井兄訪問中なりしを以て赴きしに、已に酒井兄は用事を了へて歸らんとする際なりき、依て共に誘うて改夏亭に至り晚餐を喫す。右二人の韓人は金子兄の知人なる目下朝鮮農商工部に在勤中の西和田久學氏の知己、東京の商人川村正人氏に伴はれて留學のため來朝せしもの、川村氏は已に二日前上京せられ、右二人は少しく已むなき所要ありて明日中に東上すべき筈なり。

五月十二日（水曜、天氣曇）

昨日來話掛りの韓客二人本日午後零時三十分

の列車にて東上せしむべき筈なれば、余と酒井丑松兄と専ら周旋の勞を執れり、何様二人共英語を解するのみにて邦語に通ぜざれば、新橋に着せしむるに一方ならず苦勞したり、即ち神戸ステーションより乗車せしむるに、酒井兄の紹介にて同ステーション長より車掌長に言葉を掛けて貰ひ、余等二人も三の宮ステーション迄同車したり、これ昨日俄に右二客の許へ來りし韓人二あり、何れも無頼の身元宜しからざるものなれば、なるべく同行せしめざる様に工夫せしなり、三の宮に至るま

で車中にて懇ろに英語もて旅行中の注意を與へ、着京の上は直に一書を投ぜられたし(出立前に余の名刺を二人に與ふ)殊に君等は韓國有爲の青年なれば、健康を大切に、屹々怠りなく勉め、日ならず朝鮮をして文明國の伴に加はらしむる單に君等二人の責任なるべき旨話し、不日業成り歸國の節は、再び神戸にて、君等に面會するを得べし云々語りしとき、彼等も非常に喜悅の色あり、吳々余等の厚意を謝し居れり、三の宮にて二客に分れ、歸來直に東京の川村氏に向つて發電、右二人の發足を報じ、明午前九時に着京の筈なるによりステーション迄出迎あらんことを請ひ遣れり。

五月十五日 (土曜、天氣雨) 去十二日上京せし韓客金奎植事植村金之兄より來信、英文にて一昨十三日午前九時無事着京を報じ、余等二人の厚意を謝する辭頗る懇ろに、昨朝朝鮮公使館に赴き、多分同所に滞在すべき豫定なる由申來れり、依て余は直に英文にて返書を認め、之を東京永田町の同國公使館宛て同氏へ向つて出狀したり。

六月二十二日

(火曜、天氣晴)

本日は英皇即位滿六十年に相當する大祝日

なるを以て、居留地一般休業、夜に入りて非常の賑ひを極め、各商館殊に海岸通りに

面したる向にては一面に紅提灯を掲げ、或は瓦斯にて點火、女皇の祝典を壽くあり海上には數多の軍艦滿艦飾を爲し、各自電燈を以て海上隈なく照し合せ、花火を打上ぐるあり、居留地消防夫の電氣仕掛の消火演習あり。

八月一日（日曜）

曉來非常の大雨なりしも六時頃に至りて快晴となれり、兼て本日は大阪糖業會社神戸支店員と共に舞子濱にて酒宴を開くの約あるを以て午前八時半の列車に搭じて赴けり、松菊樓に本陣を据え海水浴を試みたる後温浴を了へ、潮風冷かに衣を拂ふ處に平臥、携へ來りし新聞紙を讀了り、尙ほ無聊を慰する術なければ、婢に命じて小説二三冊を取寄せ漸く正午に達す、來會者十五六名、乗馬の快を貪るあり、シーソーの樂みを取るあり、或は海水に浴し日頃の腕前を誇るもあれば、座敷に寢轉び得意の鼻歌に日頃の鬱を散ぜんと試むるもあり、中飯となるや箸の下る雨の如く盃の飛ぶ霰の如し、宴酣なる頃酒井丑松兄の起つて劍舞するあり、竹崎康吉兄の十八番壯士踊を爲すあり、滿堂腹を抱えて笑壺に入れり、膳部を去りてより興味津々湧くが如く、十二三人の壯漢仰臥して各自得意の放歌を爲し、一時の喧噪譬ふるものなし、余は松林間に客待ちする乗馬を備ひ、一時間のラ

イジングに平素の積鬱を散じ盡せり、乗馬に汗かきて海に飛込み、上りて風呂に駈付け、了りてビール一杯に呼吸つき、我物顔に廣間の大の字、其快さ言はん方なし、小僧等四五人だけは五時半の列車にて歸途に着かしめ、余等同行十人だけ留まりて夕飯を了へ、七時十分の列車にて歸店せり。

八月四日（水曜） 天氣 夕方吉田、大口、大音の三兄車を連ねて來店せり、余の

目論見にては、本夕は改良亭にて晩食を認め、來日曜日まで大音に在神せしめ、休日には午前より舞子に行き壯遊を試みん筈なりしも、大音は來六日には急用にて歸省せねばならず、來十日は亡母堂の佛事なる由、旁々一兩日の滯神に過ぎざれば夕方より直に舞子へ赴かんと云ふ、意外の急なれど止むなく同道せり。

神戸ステーションに到る、已に列車發せし後なるを以て、八時十分迄待合せたり、舞子公園に着し直に北海屋に至る、午後九時先づ座定まりて、余は直に神戸の店なる、金子兄宛「サンハレテココヘキタカヘリオソクナル」と發信したり、ビールを酌み交し舊談に夜の更くるを覺えず十二時頃に就蓐せり、然るに近來無用心なりとて、雨戸を閉め切りしかば、暑さ堪へ難く頗る寢苦し、蓐に入りてより大音兄と時事を

談じ、やがて思はずごろごろ一睡しけるが、何處の痴漢ぞ藝娼とも見ゆべき女達三四人を引具して來り隣室に宿る、喋々喃々喧噪至極、腹立まぎれに余等四人も共に目を覺まし、鼻歌交りにわざと妨害し呉れたり、餘りの熱さに海水浴を試みんも、時間少しく早く戶外へ出づる克はず、仕方なく暫く待合せたるに、漸く金烏東山に昇る頃、海色朦朧微かに咫尺を辨ずるに至り、四人は海水浴を試む、冷氣身に徹せり、余は六時より二三分間乗馬し、七時に朝飯を了へ、七時三十分の列車にて歸神す。

八月五日（木曜、天氣晴） 夕方昨夜の連中四名にて一酌を催すべき約ある

をもて待受け居りしに、大音兄車して來れり、相携へ車を連ねて先づ大口兄宅に至り、暫く談話の末更に三名にて吉田の寓居を襲はんと立出でしに、途中にて吉田の車して來るに會ふ、依て兎も角四人にて吉田宅に引返し一茶を催し、愈々布引下の柴の家てふ至つて瀟洒たる會席に入る、庭園の結構會室の工合面憎きまでに風雅を極め、頗る一同の意を得たり、直に麥酒を呼び大に飲み大に食ふ、七日の月は冷かに中空に懸り微風除るに裳を吹く、此處俗塵千丈の市中を離れ、布引温泉を距る一町程にて、庭中四五の珍奇温雅を盡したる庵室を設け、酒肴を呼ぶにも拍手する代

りに木魚(備へ附けられたる小形の)を叩くに於て、通例の料亭と大に其趣を異にせるを知るに足らん。

持來る料理の風味何れも一同の口に適ひ、宛然平安南禪寺邊の瓢亭を思ひ出せり、麥酒三瓶を倒し、口に適したる佳肴に腹肥え十二分の快宴なりき。

やがて酒盡き肴平げられたる時午後十時に達す、茲に於て一同散會す、余のみ車して歸る、他の三人、大口は自宅へ、吉田兄は大音を携へて自宅に歸る、大音は明朝一番にて歸省する筈なり。

八月十二日 (木曜) 天氣晴 午後八時前より墓參をなす、同行する者石田四

宮の二人と店童一名なり、此夜は風なく城ヶ口墓地に達するに流汗背に普し、墓前に至れば何處より來るか鬱蒼たる青柳の梢を拂うて面を打ち裳を襲ふ清風一陣心憎きまで快なりき、墓前に跪き焼香禮拜を了へ、墓側樹葉茂り風冷かなる處に豫め番人として赴ける男の敷ける怪しげなる毛布の上に座し涼を納る、先づ童をして二十錢を與へ桃を求めしめ、男が携へ來りし南蠻酒一杯に渴を醫したり、十四日の月はあれども朦朧として雲間に隠れ、星の數も指もて量らるゝ計り、四方の景色

何となく陰を極めたり、余は四宮と共に歸店す。

八月十五日 (日曜、天氣晴) 本日は夕方に至り風出て秋涼を覺ゆ、山口氏を

辭し歸途に就かんと下山手通を下り來るや、十七日の月は玲瓏として高く中空に懸り、群星快き程輝き渡り、秋味津々たる涼風遠慮なく浴衣の袖を襲ひ、其快譬ふるにもものなし、やがて蔭に入りてより戸間漏る月光余が寢顔を射り、睡りながら、中秋の月を賞せんとは、噫々余も今夕初めて雅味を覺えたり。

八月十七日 (火曜、天氣晴) 昨夜八時半頃より晚涼に乘じ、兼て通ひ覺えし

北長狹の東京蕎麥玉簾に至る、同亭の女に瀧子と云ふあり、年正に二九の花、性極めて柔かに、禮儀作法其意を得、決して普通酌女の類にあらず、例の如く麥酒を呼び折柄來會はせし勝部兄と暫時閑談に時を移したりしが、やがて同兄の去るや、瀧子余に向つて破顔一笑、御尋申したきことありとの口上を前置にして説き出す一條を聞くに、瀧子は大口善音兄の妻女松子の親友にして、従つて大口兄と極めて親しき由ために余の學友にして在神の吉田、堀口、井口、小川、正田等の事情一として通ぜざるなく、大口兄の妻女に余の事を聞き來りしと見え、余が天津商業學校を出づると

き、一同揃寫せし幼時の寫眞を見て來りしか、種々列員の駄評を試み、殊に大口兄が來神の當時、現今の妻女を招きしまでの由來を説くに至つては中々面白く、今日までは單に一通りの酌女と思ひしが、今は大口學兄の令室が親交ある友にして、特に大口兄は時に相携へて遊ぶと聞き、話相手には頗る面白しと思ひ、雜談に時を費し十時歸り來れり。

八月十八日（水曜、天氣晴） 去六月中旬より洋糖店務多忙を極め、余ために一臂の力を借し、爾來今日迄孜々屹々たりしが、昨今洋糖少しく閑に赴き、殊に樟腦店上半季の決算未だ完結に至らざれば、本日限り洋糖店の事務を抛つて明日より舊に復せんぞす、よつて四宮兄余の爲に洋食を供し、ビア―を酌み以て積日の勞を慰せり、午後十時過より店員舉つて器具帳簿の轉置にかかり、瞬く内に店は舊狀に復せり。

八月二十三日（月曜、天氣晴） 今朝は餘程涼しく覺え、昨朝より諏訪山の温泉行を始めしが、今朝などは浴衣一重にては冷氣を感ずる程なり、庭前の梧桐已に秋聲を報ぜり。

八月二十八日（土曜） 天氣晴 茨城縣の石山義隆なる人より、故矢上豊七兄へ宛て一片の葉書にて子息三吉氏の病死を報じ來る、悲しいかな名宛人たる矢上は己に業に此世を去つて鬼籍に入る、余ために代筆となり矢上の死去を報じ、併せて矢上に代り三吉氏の長逝を弔ふ。

九月十一日（土曜） 本日は待宵の月夜にて三日月の頃より待ちし今宵なれども、盈つれば虧くるか午後五時頃より妙に曇りを帯び、いざ觀月と洒落込まんと出立つ頃には、あはれや月は雲間に其姿を隠し、春の夜ならば知らず、折角の中秋朧月とは餘り聞えぬ話なれば、山口氏へは使を遣して本夜は參上の禮を缺くを謝し、余は七時半頃より店を出て、四五日來足部の腫物にて歩行困難なるにも拘らず、大黒座に至り、福井一座の新演劇明治五十年後の神戸三幕を見物せしに、已に十時に達せしより止むなく歸店せり。

九月十二日（日曜） 天氣晴 午後二時より外出、車して大黒座前の壽し竹に至り、上場一間を取らしめ、昨夜見し福井一座の新演劇夕方までの分を見物せり、幕明き迄時餘の間ありしを以て、携へ行きし文藝を讀みつゝ、夕方迄見物し、七時過同

座を出て歸店す、歸り來れば主君よりの命にて、此度新來の大曲馬英人ウイルソン一座の技藝を見んごとて、主君御二人、金子兄并に余の四人車を連ねて現場に至りしに、休業の掲示あり、止むなく車を進めて布引温泉に浴し、了つて歩して生田社前まで來る、日没以來朧ろなりし十六夜の嫦娥は、雲間より恥し氣に其姿を現し來り、期せずして觀月の快を取れり、生田前より車を命じて歸れり。

十月一日（金曜、天氣晴） 本日より幣制改まり金貨本位となる、當店內方にては、當地正金銀行に就き新金貨二十圓形にて一千圓を取寄せられたれば、就て一見せり、余も十圓貨一枚を交換し貯藏せり。

十月十日（日曜、天氣晴） 正午過より、店友金子、八木、間島、四宮、伊藤と小生并に小松店の小供秀吉とメ七人、車を連ねて和樂園なる水族館へと志す、此日や青空一點の雲翳を見ずして宛から小春日和の如く、車塵混々として湧き衣服ために白し、水族館を見標本室を一覽し、それより赤穂鹽田の模造實景を見、大に見聞を新にしたり。

午後八時前より山口氏宅を訪はんとて立出づ、携ふるに昨夜吉岡にて求めし女

禮式を以てす、至れば山口氏内室と令嬢は内に在り、山口氏は本日諏訪山の妙見宮の祭式にて自ら世話役を司り、式事未だ終らざる由にて歸來せられずとなり、同家の雇男二人を座に招き、種々の笑話に腹を抱え居る處へ山口氏歸り來らる、余も亦本日の祭事に用ひられたる供物を饗せられ、赤飯に煮縮めの御馳走を受けたり、京子嬢今夜は晝間祭事に行きしとて白粉を裝ひ、衣裝又常日より一段の盛を加ふ、一輪の秋菊室内に薫じ、正に是れ萬綠叢中の紅一點たり、談片休めば萬籟死して四方の喧聲絶え、懷中の辰器は九時を過ぐるこゝ半時なり、余は辭し去るに臨み、携へ來りし女禮式を京子嬢へとて山口氏迄呈したり。

山口氏宅を辭するや、澄空一碧片雲だになく、三五の玉兔此瑠璃乾坤の間に跳りて、朗々晶々たる光明宛かも水の如く照り澄み、草頭樹梢の露凝つて正に是れ千穎萬穎の珠に似たり、東方一帶の畫山淡きこゝ夢の如く、摩耶山嵐の風一入冴えて身に浸むやうに思はれたり、一月前に見しよりも、東の山高く擎げられたる一輪銀盤の光は一層の清冷を加へ、夜更くるに連れ光益々さやけく、心盡しの恩賜の御衣に涙を灑ぎし忠臣、雁が音高き七尾の城に槩を横へし英雄の心も思ひ遣られて、感慨

いごゝ深し、複雑多端なる商界に瑣利を争ふ慾張り連の集合たる神港とは云へ、時に或は傾く月影を障子に寫して、一盆の枝豆に微吟淺酌の風流漢も亦無きにあらざるへし、かく中秋の夜に、飽くまで清き光を愛て得られしこそ、嫦娥には負かざりし今年なりけれ。

十月二十一日（木曜、天氣晴） 昨今は商務頗る閑散なるを以て、美文佳句の

拔萃を事とし、四五日前より「花紅葉」の拔萃を事とせしも、了りしにより、昨日より「雪月花」を閑讀し、本日は女子書簡文を通覽す。

十月二十三日（土曜、天氣雨） 重陽の節は早二十日計りの前に過ぎて、野路

行く裳裾に露時雨繁く、朝な夕なに増さり行く冷かさに、三秋も茲に暮れなんぞす四壁の虫語瘦も果て、時恰も袷に羽織を重襲の肌暑からず寒からず、今や秋郊の霽色ひとへに人に宜し、敗荷殘柳の秋を憫みて、離々たる叢中を分け行けば、枯れ枯れに咽ぶ虫の聲をわびしきものゝ限りに聞き、蜻蛉のなよなよと飛びかふ羽翅に力なきを秋の哀れの一つに數ふれば、翻々たる落葉の雨の晴れたる空に降り來るもさみしや、さりとても群雀の、出來社の登りを轉りて面白氣に友呼び交す風情、さ

ては肥え太りたる牛の、高く嘶いて己が餌の足れるに誇るとも思はしき様など
了得に打ほゝ笑まるゝ趣あるぞかし、稻田十里黄金の波の、風に搖ぎて遠く流るゝ
間に、繩逕蛇の如く廻りて、鍬かつぎたる村人のそこかしこに徘徊するを打眺めし
眼を移せば、蕎麥の花白く亂れて、隣に近き冬を早我足許に見る心地只ならず可笑
しく、さては一半青く一半黄める櫨白膠木の青女が化粧待ち顔なるにも、媚ぶるが
如き乙女の面影瞥見えて、又捨てがたき憐れは籠れり、菊には早く紅葉には未だし
き今日此頃の一日を、野外の清遊に費すは決して無益の業にあらず、神澄み氣清き
處塵念を洗ひ去つて、身神双ながら伸びやかなる心地すべけれども、終日刀筆瑣屑
の末に齷齪たる余等、頃日商務極めて閑に身の措き處にさへ窮する如き有様なる
に、憐れや出てゝ、此快活なる壯遊を試むる能はざるとは、噫々何たる因果漢ぞ、書し
て茲に及び、筆を投じて嘆又嘆、青息を吹き上ぐるごとく無慮三千丈呵。

十一月二日（火曜、天氣晴） 明三日は天長の佳節なるより、例年の通り改良

亭にて、當店開業五周年の祝典と、店員平素の勞を慰するため、會食を催さんとする云々、余等一同は主君より回章を以て案内せられたり。

十一月三日（水曜、天氣晴） 大阪より舍弟二人來神の筈なればと、午前十時

まで待受けしも來らず、依つて來神せば正午頃までに一度店へ立寄るへき旨傳言方を店員に依頼し、余は昨日主人より招待ありし如く、店員柳田、金子、喜多、石田、眞島、小松、四宮、竹崎、智積寺、藤澤、三輪の十一名と共に、主君を擁して改良亭に至り會食す。正午迄各自年來の宿望今日に成れり、食はずんばあるべからず的の勢にて、痛飲すること大鯨の百川を吸ふが如く、馬食すること驚く計り、宴酣なる頃、新來の智積寺兄立て、本日の盛宴を祝すると共に向後の引立を望む云々の主意にて一場の演説を試み、次で例の竹崎兄例の長舌を揮うて一席のスピーチを試む、正午散會一先歸店す、暫くありて舍弟二人は水産館のみ見物して歸り來る、兎も角西洋亭にて中飯を爲さしめ、廳て二人の來るを待ちて車を雇ひ、二人をして更に和樂園の水族館に赴かしむ、尙午後四時迄に歸來すべきを云ふ。

本日は氣候極めて温かにして稀有の晴天、流汗背を濕すに至る。四時前に至り約の如く二人は歸り來る、更に余も共に三名車を走らせ市田に至りて各自撮影し、それより諏訪山田中に至りしに、人込みにて明き室なしと云ふ、止むなく温泉に浴し

上つて吉田に入り晚餐を喫す、膳部の來るまで三人にて四方の雜話に時を移し、食事了へて車を雇ひ七時店まで歸る、二人等歸阪するにより、兼て積りし如く赤毛布は文五郎へ、白毛布二枚續きは文之介へ、尙本日中村より持參せしセル羽織は都合あり文之介の望むに任せ同人に與へ、文五郎へは申又二足と金一圓を與へ歸らしめたり。

十一月七日 (日曜、天氣晴) 午後三時より金子兄と共に外出諏訪山へと志す、諏訪山田中にて晚餐を認めん考なるも時刻早し、依て同所の温泉に浴せんとせしに、金子兄は眼を患ひ同泉は眼に善からずと云ふ、さらばとて布引へ赴かんとせしに、途中懷中二人共一錢の貯へなきを知り、止むなく中山手通の増田氏(池田店主任)の寓を訪ひ、湯錢丈け借受け諏訪山を過ぐ、時に同温泉所の張札には検査日に休業とあり、南無三しまつたと思ひしが、俟て布引温泉は左にあらざるべし、よし休業なるも散策には適當の路程なりと、二人進んで布引に至る、難有哉休業にあらず十分の快浴を試み、四時半頃より同所を立出て諏訪山に至り、田中へ上り晚餐を認め、五時半頃歸途に就く。

十一月十九日（金曜、天氣曇） 昨夜床に入りて不圖思ひ出せしは、時下寒氣

日を逐うて進み、郷里の寒威さこそと推せらるれば、「リスリン」一瓶を送付せんぞす
今朝榮町の島三藥店にて一封度一瓶四十五錢にて求め、之を百枚入煎餅の函に入
れて小包にて差出す、尙ゆか子へも麝香リスリン三瓶を送らんぞとて思ひ付きしは
同人の幼時より頗る好みし寶來豆のこことなり、仍て寶來豆二斤を求め、之にリスリ
ン三瓶を合せ容れ、是れ又小包に託して送付したり、國元并に愛妹の喜び知るべき
なり。

十二月四日（土曜、天氣晴） 本日北村五三郎より葉書にて近況を申來る、依
て直に信書にて返答を爲し、江若銀行設立のことにつき一言を陳べ、將來今津をし
て舊習を脱し、高島の今津たらしめず、江州の今津たらしむるは、青年諸子の双肩に
在り云々申遣したり。

十二月七日（火曜、天氣晴） 本日神港解纜の外船ベロナ號にて、主人は新八
番の外人ブングリー氏と共に、香港へ向け出發せらるゝ筈なるを以て、余は西田、藤
田二氏并に主母夫人、西田氏の妾君歳子、其外柳田、金子、小松、伊藤、八木、智積寺等の諸

氏と共に、車を連ねて新八番に至り、暫時休憩の上ベロナ號に至る、主人の乗込まれしは五十號、五十一號、五十二號の三號を容るゝ一室なり、一行茲に休憩し午後六時前迄居りしが、聽て出港の時に及びしかば別れを告げて歸店す。

十二月八日（水曜、天氣晴） 午後五時過余湯屋より歸りて髪を梳り、東京春

陽堂へ二三の書籍代金を問合さんとせし時、小松店の丁稚秀吉、慌てゝ店に駈込み、火事なりと云ふ、素破事ぞと立ち出て見しに、小松店の表二階眞赤となり、今や正に火の手を揚げんとする一刹那なりき、店員の或部分は必死となりて水を運びしに、其内丁度上組中組の人足、勘定のため集り合ひの時間なりしかば、立ろに人手を増し一時消止めんとせしに、火の手頗る早く、見る間に小松店の屋根を突抜き、火焰凄じきこと言語に絶え、二階より煽つ火勢は前の大竹回漕店に反射して、今にも延焼せん有様なりしかば、こは叶はずと店方の諸帳簿を兼て備置きの袋に入れ、人を頼みて近隣の親家へ預け、次で帳箱、筆筒等を引張り出し、店に備付けの諸品は残りなく持出したり、それより二階へ馳上り、店員の持道具を非常段梯子より下へ卸せしが、其折の混雜は秃筆の盡すべきにあらず、余は装を整へ泥濘の中人の山なす間を

潜り抜け、諸帳簿の行先、店道具の遺失物なきやうにと監督の役を司り、近傍の家々を廻り、書類の散亂せざるやうにと力め、見定めし後再び店へ歸らんとするに、巡査遮りて歸るを得ず、其内中組のポンプ并に上組のポンプを以呂葉湯の湯室に据附け、一は當店の井に下す、瀑なす水流の下に、さしも一時は凄じかりし火勢も大に衰へて見えたり、何様人寄り繁き折柄なりしかば、幸に小松店の二階を全焼したるのみにて、店へ延焼の不幸なく濟みしは不幸中の幸なりき、それより店は掃除に取掛り、一旦持出せし諸道具を取纏め、午前一時に至りて就眠す。

十二月二十九日（水曜）　香港なる主人の許より來信、航海中の出來事面白く通信せられ、宛然末廣鐵腸の啞の旅行を讀むが如し。

明治三十一年日記拔萃

一月一日（土曜）　午前零時に至るも夜來の細雨止むことなし、昨夜來徹夜すべき筈なれば、余は他の店員が午前三時頃に至りて眠さに堪へ兼ね、各自首足を交

へて横はりしに拘らず、一睡も食らず、聽て四時過より順次沐浴を了へ、配膳の用意整ひてより年賀の式を擧ぐ、曉方に至りても尙細雨止まず、年賀回禮に赴かんも、雨天にて歩行困難なれば暫く見合せ居りしが、十時頃に至り、少しく小降りとなりしを以て車して出づ。

一月二日 (日曜) 午前十一時より吉田兄と共に會合試筆會を催さんとする、依て余に來會せよと云ふ、直に車を命じて同宅を訪ふ、座には吉田兄の外に、同じく吉田兄と同店に奉勤せらるゝ中保素と云ふ畫師あり、大に座興を助く、余も強ひらるゝまゝに都々逸二三と俳句二三を亂書したり。

一月二十七日 (木曜) 天氣晴 本日試みに改良ヒーロー、ナルホド、ヨロシイの三種巻煙草一個宛買求め、飲み試みし上口に適したるものを大に買入れんとす孰れも最近の製造に係り、包裝、品質おさ々々外國品に劣らざるの逸品にして、店にての評には苟も愛國心ある者は益々購入して輸入を防止すべしと云へり、阿々。

二月二日 (水曜) 天氣晴 午前大野和吉氏來店、余は午後同氏と商談中、洋裝有髯の紳士手に白ケツト並に洋行カバンを携へ入り來る、而して余の顔を熟視す

るものゝ如し、余も又見たやうの人とは思へども急に思ひ出せず、紳士脱帽余に向つて西川サンと云ふ、余驚き見るに此は如何に、十二三年前今津時習學校にての同窓にして、爾後相分れ今は大津の松本なる堀江姓を冒し、往年余が東都遊學中一度鶴ヶ浦にて舊を談ぜしことあり、以來茲に六七年、年中僅に一二度の文通のみにて互に相見るの機なかりし莫逆の友石田吉之助氏其人ならんとは、思ひも設けぬ不思議の再會にコレハ々々々先づ座を與へ來神の用向を伺ひしに、同伴者一人(舊時郷里の郡衙に在りし八田某なりと云ふ)ありて、公用を帶び本夜徳島へ向け出足するなりと云ふ、別後の閑話に時を移し、應て同氏は歸り去れり、一別以來茲に數星霜、變れば變る世の習ひとて、往年竹馬の遊を共にせし友は、今や官海に身を投じ、洋装蓄髯して一見當世紳士の外觀を備へ來り余と再會せんとは、余も意外の面談なりしを以て一入分袂を惜めども、石田兄(今は堀江)は公用を帶び、別けて同伴の人もあることゝて其意に任せず、不日再會を期して分れたり。

二月三日 (木曜、天氣晴) 本日は節分の佳節にて、例年オバケとて老若男女各其風采を異にし、競つて奇を弄する習慣なるも、斯かる陋習は年と共に消え失せ

本年の如きは二三の蓮葉娘又は藝者輩のチラ々々異装して白晝横行するを見るのみ、余午後八時頃より店員伊藤、智積寺の二兄を伴ひ、楠社に至りて節分の夜景を見しに、此處は俗塵混々として人の山を築き、久しく留まるべき勇氣も出でず、倉皇引回したり。

二月五日（土曜） 父午後一時半三宮着にて來神せらるゝを以て、余は車して

ステーションに迎ふ、着神後共に車して店に伴ひ主人へ引合せ、携へ來りし土産物を差出し、少刻會談の末、更に山口氏宅を訪ふ、午後三時過まで種々閑話に時を移し、それより山口氏の誘はるゝに従ひ、父と共に中華會館に至りしも、閉館にて止むなしく引回し、今夜は父山口氏と共に夜景を同館に見ん筈なり、余は明早朝訪問すべきを約して辭し去りぬ、父來神に際して文七氏より余に鴨一羽贈與せらるゝ、こは直に主君に呈せり。

二月六日（日曜、天氣晴） 主人の許を得て、昨日來神せし父を伴ひ親家並に

市中案内を爲さん積りなれば、昨宵來本日の天氣如何にやと案ぜしに、天なるかな幸ひにして朝來晴れ渡りたりとは云ひ難きも、雨の虞れは露見えず、午前八時過よ

り昨日父より預りたる兵庫豊島氏行の進物と、松宮氏へ贈らんとて昨夜風月堂にて求めし菓子箱と、山口氏へ進呈せん筈なる昨日東京荒木より小包にて送付し來りし淺草海苔とを持參、車して山口氏方に父を訪ふ、先づ携へ來りし海苔を呈し、次で昨夜來の御動作を謝し、聽て山口氏と共に三車相並んで兵庫の豊島氏を訪ふ。

山口氏は途次一二ヶ所立寄る處ありとて分れ、余は車を命じて父と共に楠社に詣て、福祉を祈り、それより車を解きて楠町裁判所、商業學校の前を經、鐵道線に沿うて歩みつゝ、松宮氏方を訪ふ、時に午前十一時半なりき。

文之介大阪より本日來神すべき旨父の話なりしに、行き違ひにならんも氣の毒なれど仕方なしと諦めつゝ、余等二人は歩みて諏訪山に上る、途次の建築物等につき一々指摘して説明を與へ、田中樓に入る、此日は天氣宜しく、山に上り來れば冬季とは雖も流汗淋漓背を濕すに至りしを以て、余風邪の氣味あるにも怖ぢず父を促して入浴を試む、蓋し遙々山河を隔て、可憐兒を訪はんため來ませし乃父の心中を慰めんには、こよなき唯一の樂境なれば、心を盡して歡待せんものと思ひ、吾身を省みず父の心を樂ましめしなり、諏訪山温泉の水清うして、父も大々的の喜色面に

現はれ、十分の温浴を試み、田中樓上眺望絶佳なる一室を占め、心地よげに神港全景の風色明媚なるを賞しつゝ、廳て盃洗の音チリン々々々と共に例の清楚たる料理は前に現はれ、日頃嗜み玉はぬ父上も、今日は別なりとて快く二三杯を過されたれば、余も又強て二三杯を傾けしに、腑甲斐無や早満面時ならぬ紅葉を呈し、陶然として玉山崩るゝの思ひなり、盃は止めて食事を取係りしが、此間父は縷々國元の出來事を始めとし、弟妹等將來の處置、從妹建部萬子、西川爲子二子の入嫁の事柄等を話され、久々にて國元の近況を詳にするを得たり、余も亦將來の方針を父に具陳し、近來の快宴なりき、廳て食事は終へつ、談止みいざ立出でんと婢を呼び勘定を命ぜしに、婢引返し來りて余に向ひ、貴所は堀口さんに非ずやと云ふ、余は否西川なりと答ふ、婢は忽ち「そんなら矢張左様じや」と私語しつゝ、樓下に向ひて「お神さん矢張さうです」と云ふ、余は其何の意たるや了解に苦み、若しや舍弟文之介の來會せしにあらざやと、心に浮びしまゝ樓上より往來を見下せしに、今や舍弟は田中を出て余の聲音を聞き付け、車夫に賃錢を取らせんため下り行く所なりき、急ぎ呼び入れ數刻談話し、今一時間ほど早かりせば共に會食の樂みありしものと悔みつゝ、さて如何

にして余等の田中に在ることを探りしやと尋ねしに、同人は午前十時半梅田發にて來神(丁度余等の松宮氏宅を去りし時列車の入り來りしなり)直に山口氏を音づれしに、兵庫へ向け行きしと聞きしも、兵庫は已に出て去られし跡ならんと推し、松宮氏を訪ひしに、正午前來られ直に何處かへ向け去られしと聞き大に失望せしが俟て暫し諏訪山を搜したる上萬々其行先を知り難くば、其時の事と諦め歸らんと決し、田中の下迄車して來りしに、丁度余の聲音を聞き付け、試みに余等一行の來否を樓婢に尋ねしに、「堀口さんなら來てだすが、西川さん來とつてやおまへん」と云ひしも、聞き覺えの聲音誤なしと再び婢に迫りし故、婢は余に向つて前記の如く堀口さんだすかと問ひに來しなり、茲に於て前後事實を明かにし、兎も角も山を下らんと三人同樓を立出づ。

歩みて二番の踏切筋を經、小寺九鬼二氏が高壯雄大なる居宅に父の眼を驚かしめ、其れより元町三丁目の小島に至りて父一人坐像を寫し取らしめ、次に三人團欒の處を寫さしめ、それより榮町に出て、正金、三井、三八、三菱の各銀行を見せしめ、居留地に入りて公園に至り、其風物自ら趣を異にするを稱しつゝ、税關に至りて其輸入

品棉花の雨に曝されつゝ路上に横はりあるもの其數幾千なるに一驚を喫し、それより海岸通の風景を見て南京町に入り、更に歩を進めて山口氏方に歸る、如此神戸市中目ぼしき所は大略見盡し、残るは布引と須磨、舞子並に和樂園位なれど、冬季の遊覽其妙ならざるを知り、再度の來神を期し、殊に其内余が神戸に一家を構へし曉は、優々自適して滞神せらるゝを得べければ、又の來會を約して本日は此れに止め山口氏方にて休憩す、文之介は午後六時七分の列車にて歸阪す。

余は留まり、山口氏未だ歸宅なきを以て父の相手をなし、晩食さへ父と共に振舞はれ、山口令室と鼎座にて既往將來を談じ、行末互に相親み親族の交りを結ばんことを誓ひ、兎角する内山口氏宅の裏手なる關帝廟の住持某氏も來會せられ、暫時閑話に時を移し、余は明日父歸省につき託するものもあり、厚く令室に謝辭を述べて歸店す、時に午後八時頃なりき。

扨明日父に託して故宅へ贈るべき品に就き種々考慮せしも、瓦煎餅の外これとて目立ちたる佳菓もなし、老人方の口に適したる柔かなるものと思へども、文之介已に昨日大阪より饅頭百入一箱を携へ來りし故、余は直に小供をして瓦煎餅二百

枚入一箱と風月堂の唐饅頭五十入一箱を求めしめ置き、外に谷氏方にて父の註
文品たる精製樟腦一封度、並に山口氏に贈らんため一封度を求めたり。

父來神に付ては、祖母、母二氏よりと北村五三郎兄と舍弟由太郎、勇藏二人より手
紙來りたり、依て委細の事は祖母と母とに文通したり。

二月七日（月曜、天氣晴） 本日は又昨日と打つて變りし晴天にて、鶯の啼き
さうな春日和、さても父の來神に天氣廻りの善きことよ、何よりの幸なり。

午前八時二十分頃より昨夜買整へ置きし土産物一ククリを携へ、車して三宮ス
テーションに父の歸郷を見送る、九時十三分發の列車に乗ぜん豫定なりしに、同列
車は京都止りなりけり、少しく失望せしが兎も角父の來着を待ちて相談せんと思
ひ待居りしに、九時前に至りて父車して來る、直に相談せしに兎も角京都迄至らん
と云ふ、倉皇荷物を整へ、余は入場券を買ひてプラツトフォームに至り、父の出足を
見届けたり。

二月十日（木曜、天氣荒れ） 昨日は見事なる晴天にて實に小春日和とも云
ふべき申分なき天氣なりしが、今朝は其裏を掻き朝來頗る曇天、忽ちにして細雨至

り一時は晴渡り、河の雨かご云はん計りに人を欺きしが、こは又如何に、不意に降り来る霰は殆ど祭事の餅撒の如く、其大さお多福豆の如し、忽ちに雪と變じ、一時は万字巴字は愚かのこと、咫尺を辨ぜざる程の荒れ、従つて寒氣は身を削るかとも怪まる。

二月十二日（土曜、天氣晴、荒れ） 今朝眠りより覺むれば、滿街白雪皚々、瓦上

積むこと寸餘、蓋し此の如きは神地稀に見る所、余の如き雪國に生れし者は平氣なるも、由來雪花を見る珍らしげなる都人は、殆ど白金の天降りせしかの如く驚喜し、市内の奈邊には饑餓に迫り、旻天の無情を啣つ貧民の群を成すをも知らず、顔に或は雪見の宴を張る無情漢なきにあらず。

唯見る一面の銀世界、萬種の汚物を蔽ひ、頗るの壯觀を呈せしも、忽ちにして日光のために溶解せらるゝや、蔽はれし諸汚穢は現れ來り、路上泥濘足を入るゝの地なきまで、に穢れ、憐れ見る影なき有様、實にや世情の下層は何れも是れに外ならずと思はる。

二月十三日（日曜、天氣晴） 本日は愈々本調子、極彩色の晴天にて、一天拭ふ

が如き青空に兎の毛の先に滴る露ほどの雲もなく、加へて春風は徐ろに來りて衣を拂ひ、氣候亦温和、誠に野外の遠足を行はんには此日を措いて他に見るべからず而も奈何せん身は之れ鐵窓も管ならざる巖則の下に在り、時あれども出づるに機なき果敢無さに、憐れや終日を讀書に移しぬ。

二月十六日（水曜、天氣雨） 昨夜は此程出來上りし父と舍弟と三人にて寫せし小照の裏に、認むべき佳句もがなと考へしも見當らず、折節金子兄が謠曲通解より引照して余に示されし業平が歌、

「世の中にさらぬ別れのなくも、かな千代もと祈る人の子のため」と定めたり。

二月十八日（金曜、天氣雨） 昨日は餘りなる晴天なりしが、其裏にて今朝來別に雨模様と云ふ程にてはなかりしに、正午前より細雨霏々として至り、夕方まで淫雨濛々、其後雨止まざるのみか反つて一入の烈しさを加ふるのみ。

二月十九日（土曜、天氣曇） 山階宮殿下去十七日西京にて薨去遊ばされしにより、宮中は五日間の喪仰出だされ、人民は三日間音曲停止の御布告ありたり。

二月二十日（日曜、天氣曇） 又々餘寒烈しく、綻びかけたる梅も其嬌唇を閉

ぢ、笑ひ初めし柳も其眉を擧めしなるべく、午後に至りて曇り勝ちなる空合より、六花覺束なげにチラ々々降り出でしも、流石に時候外れを氣遣ひしにや、僅かにして其姿を見せざりき、忽ちにして温、忽ちにして寒不順も甚し、夜分は主母夫人を始め店員過半の總出にて歌骨牌源平競ひを數番試む。

二月二十三日 (水曜、天氣雨) 今朝は主人の依頼により歌骨牌二百葉の執筆を爲す、こは當今店にて大流行の歌骨牌に充てんため、奥にて特に堅固に仕立てしめられし新調のものなり、午前十時頃より始め午後三時迄に終る。

二月二十四日 (木曜、天氣晴) 晴天なれども如月の天、春とし云へど風なほ寒く、恰も是れ「朧月まだはなされぬ頭巾かな」。

三月一日 (火曜、天氣雨) 夜來の春雨今に霽れず、如月の天は春とは云ひ兼ねるほど風寒かりしが、愈々彌生の花季となりしに、天候多少氣兼ねせしか、又は雨氣の勢力温和にて、「小娘の假寢うつくし春の雨」と云ひたげなり。

三月二日 (水曜、天氣晴) 昨日は雨模様にて少しく暖かなりしが、本日は又餘寒料峭春とは思へず、然れども春光日々に濃かにして、至る處芳春ならざるはな

し、況や黄鳥友を園林に呼び、燕子風を帯びて斜に堤柳に舞ふに於てをや。

三月三日 (木曜、 天氣晴) 今夜力石兄より短句にて來信、裏面には、江戸の夢京もうつるや春の雨と題し一種異様の文句にて久濶を謝し來れり。

三月四日 (金曜、 天氣曇) 二三日前までは駘蕩養花の天とも云ふべき驟かの暖かさにて、肌着脱き捨てなんとするほどなりしも、夜來の月暈と面向くべくもあらざる北の風とは、朝來雪を醸すの密雲となり、午前十時頃よりは一點兩點の霏路行く人の袂に寒く、籠鶯の涙も氷るべく思はれたり。

三月八日 (火曜、 天氣雨) 朝來の雨天に頭痛岑々として大に快ならず。

〔衛士の柴の晝も燃ゆるや春の雨〕

三月十三日 (日曜、 天氣曇) 朝來晴曇極めて不定、午後五時頃より漸く晴天と定まり、夜に入りて一天青空心地よく澄み亘り、星斗亂點筈にて搔き落さん計りなり。

三月十五日 (火曜、 天氣曇) 朝來雨とも雪とも分らざる空模様にして寒氣尙烈し。

本日は衆議院議員臨時總選舉當日なるを以て、市内は本城山本二氏の競争にて頗る騒がし、夕方余は實況を一見せばやと立出でしに、宇治川近郊人の山を築く、尤も當年は其筋より嚴令ありて殺氣蒸々たる迄にはなきも、何となく騒ぎ立てたり。

三月十七日 (木曜、天氣晴) 午前は極上の快晴にて、天には一點の雲翳を見ず、うら、かや雀の落す屋根の苔、以て當日の景色を寫出して餘蘊なし、うべなり本日より彼岸に入りしもの「暑いも寒いも彼岸まで」俚諺は實に吾人を欺かず、さりながら餘りの快晴に、午後三時頃より少しく曇氣を帯び來りしが、雨なんどの氣合なくして濟みつ。

三月二十日 (日曜、天氣晴) 夜來の濛雨今朝に至りて全く霽れ、本日のサンデーを指折り待ちし人達にはこよなき福分なりき。

本日は學友吉田熊太郎君華燭の典を擧ぐる筈なれば、兼て用意せし祝品(寫眞ブック一冊)を美々敷裝ひ、外に目錄一通と祝狀一片を添へ、店員三輪をして車して持參せしむ。

今夕七時過より下山手山口氏を訪ふ、携ふるに先般小島にて複寫せしめし京子

嬢の寫眞一葉を以てす、至れば來客あり、談話酣なりしを以て、余は暫く控えて令室の請ぜらるゝまゝ臺所に至り、令室令嬢傭男作たんと火鉢を圍みて談話す、茲に於て余は携へ來りし寫眞を令室に呈せしに、其出來榮ありしを痛く賞せられ、令嬢も一見頗る嬉々の色現れたり、來客二人の去らるゝまでは、遠く舊に遡りて余が去る二十七年一月來神、山口氏宅に寄食せし當時に思ひ及び、舊話混々として盡きず、四人相顧みて抱腹す、來客二氏は九時半頃去られしにより、余は再び奥の間に招かれ、山口氏並に作たんと共に各選舉區當選談に口角泡を飛ばし、聽て午後十時に至りて割愛辭し歸れり。

三月二十一日（月曜、天氣大荒）今朝來晴天なりしも、風伯大に其暴威を逞らし、午後二時前後に至つては、夜叉王の荒れ廻る如く途上の土砂を捲き上げ、路行く人をして殆ど困難を覺えしめ、實に物凄き景物にてありき、幸ひ四時過五時近くに至つて少しく歇みたり。

三月二十四日（水曜、天氣晴）本日は陰曆三月三日にて、上巳に當り、子女ある家にては例年の通り雛祭りを爲す、朝來小雨降り切りしも、午前十時前より全く

の晴天となり、昨日とは打つて變りし温かさ、桃の節句は不意の儲けものなりき。

ゆか子と文五郎兩人へ文通し、各一金宛を封送したり。

三月二十五日（金曜、天氣晴） 朝來晴天にして氣候極めて温和、實にや陽春

三月彌生の美晴此の如きものこそと思はれたり。

此夜腹工合悪しく、ビール一壺を求めしめ立ち、に傾けしが、其當時は陶然の思ひありしも、追々酔ひを覺えしまゝ、假寢し、小便を催せしまゝ、立出でしに俄に酔ひ廻り足元常ならず、果ては目さへ眩み全身冷水を被りたらん如く冷え渡り大に不快なり、こは大事と厠に上り氣を静めしに忽ち治まり常に復せり、余は今夜の如く泥酔せしは、七八年前東京留學の砌運動會に行き、ブランドーのために痛く、困りし事ありしと前後二回のみ、慎むべきは飲酒なりとホト々々感じ入りぬ。

三月二十九日（火曜、天氣晴） 昨日來風邪の氣味にや頭痛して快ならず、幸

ひ本日は晴天なり、主人も不在なれば好機逸すべからずと爲し、午後より五二會品評會見物の爲めに赴けり、未だ出品完備の運びに至らざれども、各縣夫々美を競ひ盛を凝らして中々の壯麗なり、入場第一に人目を惹くは、神戸澤田吳服店より出品

せし太夫とカムロ二人の人形に善美を盡したる衣を纏はしめ、之を特別の室に設け入れしものなり、外に京都の西陣織は例により精巧を極めたり、就中郷里の出品たる湖魚のアメ煮きは、香氣最も美にして鼻口を撲ち、思はず佇立せしめたり、午後三時頃までに一見し了り、それより宇治の山の墓所へ上りて市中を眼下に眺め、フ○の谷を経て歸店せり。

三月三十一日（木曜、天氣曇） 朝來曇天にして果ては春雨降り切る、春雨や

酒一升に高いびき、生憎本日は月末にて俗務多端、中々左様に香氣には參らざりき。

四月二日（土曜、天氣晴） 昨日來の微雨本日に至りて全く去り、風稍々冷な

るも申分なき天氣、明日に神武大祭を控えしことなれば、本日の好晴は天下幾百萬の士女を喜ばせしか知るべからず、今朝少弟勇三、少妹はま子の二人より、昨日芳太郎よりの來信と同じく、昨月來の大試験成績を通知し來れり、依て勇三へは筆墨、はま子へは毛糸色々取交ぜ十オンスとゴムマリ二つを贈與することゝし、二人宛の信書一通を認め小包にて送付したり、其序に瓦センベイ百枚を送りたり。

四月三日（日曜、天氣曇、晴） 待ちに待ちし本日の神武祭、日曜日のことにも

あれば夜來の曇天如何あらんと危みしに、曉起すればうたてや細雨蕭々たらんとは、失望落膽云はん方なし。

四月十二日（火曜、天氣晴） 午後九時過門戸を叩く人あり、誰れならんと開

けしに主君其人ならんとは、エンプレス、オブ、チヤイナ號九時神戸に着したる由、意外に早着せしにより出迎ふる暇なく不都合なりき、直に手荷物だけ取りに行き、今夜一同へ酒肴を賜はり聊か歸朝の宴ありたり、午前一時半就蓐。

四月十三日（水曜、天氣晴） 昨夜深更に及びしにより今朝は非常に睡く、午

前七時に曉起、エンプレス號に主君手持品尙六個と、同行日下部氏のものもあり、ポト一艘を傭ひ入れ、主君、外小松、智積寺、竹崎、廣内並に余の六名同船に赴く、先づ荷物はポトに移し入れ、それより主君に伴はれ同號の室内を見物して歸る。

四月二十四日（日曜、天氣晴） 昨日常備艦隊富士、八島、松島、浪華、秋津洲、橋立

の諸艦舳艦相啣んで入港す、其中富士、八島は新造にて未だ嘗て帝國に無かりし戰鬪艦なるを以て昨日來見物人山の如し、而も本日より明日中迄富士を、明後明後々日は八島の縦覽を許さるゝを以て、午後一時半頃より、若主岩藏氏を始めとして店

員十餘名と共に、熊吉舟を艤して富士の見物に赴く、何様朝來稀有の美天にて殊に休日なれば、近縣より見物に出掛くる者山を成し、余等が舟富士に近づきしは三時半頃なりき、先着の見物人大舟に七八艘もありしに、己に時間に迫り混雜の爲めか急に入艦禁止となり、己むなく無數の見物人は名殘を惜みて引回せり。

五月五日（木曜、天氣晴）昨日よりの美天の爲めか温暖頓に加はり、又夕方前に至りて少しく曇りを帯びしが、明後七日より二日間神港開港三十年祭を舉行することゝて、只管晴天を祈るものから、少しの曇天大に氣掛りとなりぬ。

五月七日（土曜、天氣晴）本日は神戸開港三十年祭にて、店は全休なるを以て、早朝より門戸を飾り、午前九時過より衣を更めて山口氏に父を訪ふ。

五月八日（日曜、天氣晴）昨日は稀有の快晴にして非常に温暖なりしが、夜來天候一變して雨となり、終日止まず、正午過より一入の烈しさを加へ、果ては篠を衝かん計りの凄じさ、加之風大に出て吹き降りの大荒れ、たゞ閉口の外なし。

夜分に入り子供をして龜井堂にて瓦煎餅二百枚入一函を求めしめたり、これ父の明日歸國せんとするに託し、祖母並に弟妹等に贈らんとするなり。

五月九日 (月曜、 天氣晴) 昨日と打つて變りし美晴、昨日と今日と地を換へたらんには、晷や賑しさも一入なりしならんに、併し昨日の雨天にて果さゞりし種々の餘興催しものは、本日_を以て舉行することゝなり、殊に屋臺等引張り廻し、市中は尙日の丸の旗章と日の丸の提燈各軒に翻り、何となく騒がしかりき。

午前八時十五分の列車にて父は歸郷すべきにより、余は先づ昨夕求めし煎餅を携へ車して三ノ宮ステーションに至り待合す、八時頃に父は車して來らる、依て大谷行の切符と入場券を購ひ出發を見送たり。

五月十一日 (水曜、 天氣晴) 午後七時頃一片の號外は意外の出來事を報じたり、曰く「清國新開港沙市にて暴徒蜂起し、日本領事館と英國領事館を焼き拂ひたり、人命には別條なし」と、依て朝鮮沿海航海中の帝國軍艦は、直に同地へ派遣を命ぜられたり」と。

五月二十七日 (金曜、 天氣曇) 正午過までは晴天なれど何となく雨を帶びたる模様にて、午後五時前より小雨となれり。

昨夕店童誤つて店先の門戸締りを忘れ、深夜主人他より歸宅せられしとき、戸は

開きたるまゝにて店員枕を並べて熟睡、前後不覺なりしとこのことにて、一同朝飯を了へたるとき、主母夫人の前に呼び附けられてお目玉を頂戴せり。

六月二日 (木曜、天氣晴) 父より(大津にて)來る五日早朝出神の旨葉書にて通知ありたり。

六月四日 (土曜、天氣雨) 朝來雨、午後五時過より一入の急雨となり盆を覆さん計りの烈しさ、明五日は洋糖店員の發議にて舞子へ出遊せんとするの議あり余は父の來神なれば豫め辭じあれど、外の逸り雄の面々何れも終日止みなき雨には憂色を帶べり、願はくは諸兄の爲め明日は晴とならしやりたきものにこそ。

六月五日 (日曜、天氣雨) 夜來の淫雨今日に至りて尙止まざるのみか一入の烈しさなれば、昨日より待ちに待ちたる本日の舞子行も憐れオヂヤンとなれり。

六月六日 (月曜、天氣晴) 昨日より打つて變りし美晴にて日本晴の心地せり、今朝八時十八分三宮發にて父歸途に就く。

六月十日 (金曜、天氣曇) 朝來曇天、午後に入りて小雨霧の如く至る、明十一日より入梅なれば其下拵へならんか。

本夜號外にて衆議院解散貴族院停會の報至る、これ増稅案を衆議院にて大多數を以て否決せしに因る。

六月十二日（日曜、天氣晴）　待ちに待ちたる十二日は來れり、吾人同店の輩

が鶴首せし舞子濱大快遊の日は來れり、曉起各自裝束了り、午前八時三十分の發車にて赴く、舞子濱龜屋に本陣を構へ、休憩の上向側の松林にて餘興の運動會、二人三脚、綱引、疾走等快遊を爲し、余は熱望せし乘馬を試み日頃の鬱を醫したり、十一時半遅れて主人並に三和市藏氏等來會せられ、正午前配膳成り、獻酬應答非常の盛讌にて、酒井、智積寺二氏の劍舞、竹崎の壯士演劇一人身振り等、一時は中々の喧囂を極めたり、午後よりは各自夫々好む所に赴き、大弓、揚弓、ブランコ、水泳、乘馬等の樂に耽り、余も二時頃よりは主君並に糖業會社の某氏（同行者）等と共に轡を駢べて大愉快を取り、それより大弓、揚弓をも試み、五時前小松兄と共に出店の茶屋に休憩してビール一本を倒し、正に龜屋に歸らんとすれば、衆何れも歸裝を整へて今や同屋を去らんとする處なり、余等も詮方なきまゝ衣を更め、諸兄等は舞子迄徒歩する由なれども、余と小松、藤澤、竹崎の四人は留まり靜かに歸裝をなし、五時三十七分公園發の